

第一次国共合作期におけるコミンテルン 軍事顧問の役割 (15)

— А.И. Черепанов : Записки Военного Советника
в Китае — を中心として

滝 本 可 紀*

On the Role of Military Advisers of Comintern in the Period of the First
Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (15)

Yoshinori TAKIMOTO

Abstract

In less than half a year, revolutionary forces succeeded in gaining control of four of the most important provinces and coming out to the Yangtze River.

It was natural from all points of view to make liberated Wuhan the new centre. But Chiang Kai-shek was opposed to this. Wuhan had been taken by military forces not under Chiang's control.

Nanchang was more desirable capital for Chiang Kai-shek. He was compelled to agree that the government move to Wuhan, but for himself he said: "Of course, I'm ready to move, but the commander-in-chief must be closer to the front, and as you know the front is presently in the east; units are fighting in the Zhejiang and Nanking area".

He intended to establish contacts with imperialist forces and secure their support in order to suppress the Communist party and the popular movement.

1926年夏、北伐が始まり、国民革命軍は半年も過ぎないうちに、中国の最も重要な省の四つを占拠し、長江流域に進出した。今や、あらゆる観点から見て、武漢が新たな政治の中心になることは当然に思われた。だが、蒋介石はこれに反対した。武漢が蒋介石の支配下でない唐生智の軍隊によって占拠されたからである。

彼にとって南昌が望ましい政府所在地であった。だが、結局、彼も武漢に賛成せざるを得なかったが、次のように言って武漢政府から離れることを正当化した。“自分は国民軍総司令として戦線の近くにいないなければならない。今や、戦線は華東にあり、部隊は浙江、南京地区で戦っている。”彼は上海にある帝国主義列強の勢力と結び、彼らの支持を得て、中国共産党及び

民衆運動を鎮圧しようとした。以下はこの作戦の軍事顧問、А.И. Черепановの回想録《Записки Военного Советника в Китае》1976 НАУКАの501頁～522頁の全訳である。

命をかけて

ソ連の顧問達は北伐に際し、中国の同志達と勝利の喜びも敗北の悲しみも分かち合った。軍事行動が全面的に発動される前にすでに、唐生智のもとへНефедов (Павлов)が派遣されていた。彼は実際は、軍事専門家としてではなく、唐生智と関係を樹立するための全権委員として行動した。その後到我々の軍事要員が登場した。すべての主要な兵団に顧問が配置された。第7広西軍にのみ政治顧問И. Мамаевが配置され、軍事要員はいなかった。だが、彼がかつての軍閥のところに居ることはまた、有用であった。彼はブリュヘルの《目》

1994年9月17日受理

* 一般科

となり、中国側に総司令部の指令を実行するよう促した。

Горев の例ですで見たと同じように、顧問達は作戦指導において、何と大きな役割を担っていたことか。顧問達が没頭し、献身的に行なった活動は中国大衆に高く評価された。ある友人が私に、武昌陥落を祝って漢口で行なわれた式典に顧問達が参加した時の事を語ってくれた。ロシア人を乗せた自動車はデモ行進中の群集に、万雷の拍手で迎えられた。歓迎の言葉が響いた：《蘇連俄国人好》(ソビエトロシア人はすばらしい)。言葉の障害は相互理解の妨げにはならなかった——誠実な、心からのほほえみがその障害を取り除いた。

ソ連のパイロットの英雄的行動は住民の格別の好意を勝ち得た。私はすでに、彼らが直面せざるを得なかった多大な困難について書いた。8月20日、飛行機3機が急遽、戦線に飛び立った。鉄道線路が唯一の信頼できる目印であった。それ故、飛行機は高度150mでその上を飛んだ。だが、韶関より先に行くには、山脈を越えるために3km上昇しなければならなかった。今にもこわれそうな飛行機が積雲の中に見えなくなった。コンパスは、地図が無かったのでほとんど何も役に立たなかった。結局、ホンチョウではなくパオチンに現われた。その中の1機がその川の砂州に着陸し、その修理に一週間を要した。水田に降りたもう1機はパイロットのКостюченко を乗せて、広州へ戻った。

武昌の近郊に、Кравцов と Тальберг の1機のみが到達した。10月10日、Сергеев が彼らに加わった。武昌攻撃に際し、パイロット達は自分の生命を惜しまなかった。離着陸の際には必ず砲撃を受けた。飛行機のこわれやすい、粗雑な各部に弾の穴がバックリ口を開けていた。第4軍の勝利に関する報告書の中で次のように述べられているのもっともである：《武昌は飛行機と第4軍によって占拠された》。ソ連のパイロット達は南昌付近においても、大いに役立った。

南昌解放後、ソ連のパイロット Козюра (Верн) と Кобяков が牢獄から救出された。彼らは《ユンカース》で広州から飛び立ち、長沙の代りに南昌の敵陣に着陸し、軍閥軍の捕虜となった。

飛行機の活動に関する報告書の中で、Василий Сергеев はパイロット達の活動がいかに張りつめたものであったか、納得のいく説明をした。江西省の戦線で飛行機は、《国民革命が決して忘れることのない、そしてソ連も将来研究するであろう役割を果たした》と彼は書いている。我々の司令部の見解では、飛行機は心理的

効果をあげていた。戦線ではそれが現われるとどこでも、文字通りパニックを引き起こした。例えば、装甲列車は飛行機を相手に、15分間さえも持ちこたえることができず、パニックに陥り、陣地を捨て、結局、その作戦地区を無防備にしてしまった。

飛行機は軍と軍を関係させ、多くの重要な偵察と爆撃を行なった。赤旗勲章の候補者として先ず第一にパイロットを上申するという指令が出されたことは(その中に整備兵も含まれる)、彼らの軍事飛行が見事にやり遂げられたことを物語っている。

当地の飛行作業の条件は極めて厳しいものであった。戦線の飛行隊の活動は最も暑い時に行なわれた。搭乗員達は昼も夜も休みなく働き、疲労困憊した。ほとんど全員が喉の病気で激しい頭痛に悩まされた。これは飛行の際、身体が急激に熱せられたり、冷やされたりしたせいであった。

この季節では方向を定めることは特に困難であった。大い視界が悪かった。いつも霧がかかっている、真下のみ見えた。地形は極めて分かりにくかった。何故なら、我々の作戦地域では、山並み以外の平地は一面水田と畦道で縁どりされており、大きな道路はほとんど無かった。川は沢山あったが、その数が多く、また起伏のある地形でそれらを見失うために、目標としての価値がほとんど無かった。我々の使用した地図は84,000分の1の縮尺であった。この地図では、400-500kmの飛行コースは数メートルになり、大変かさばって地図用ホルダーには収まらなかった。気象用データは全く無かった。飛行場は水田に建設された。その土地は極めて湿気を帯びやすかった。飛行場の規模は大部分がとても小さく、離着陸はいつも危険をともなっていた。パイロットの飛行技術のみが飛行機の破損を救った。

ロシアから運ばれた爆弾のストックは戦線で全て使い尽した。破碎爆弾に大きな貫通力を与えるために、旋回軸なしでそれを用いなければならなかった。何故なら、ここでは爆弾の破碎作用は特別に広域に拡散する必要はなかった。爆弾投下の目標は強化された中心部であった：《大部隊は遮るものがない場所には存在せず、建物や城壁の内部に作られた穴(穴は飛行機が戦線に出現してから初めて作られた)の中に隠れていた。軍は縦隊ではなく細い縦隊で移動しており、彼らの大部分は機関銃で撃たれ、爆弾は単に軍の士気を挫くためであった》。

ソ連の顧問達もパイロットに劣らず戦線で勇敢に行

動した。全ての指令が適時に実行されることは全く期待できなかった。顧問達はしばしば、かつての軍閥の無言ではあるが執拗な抵抗に出くわした。国民革命軍内に存在する諸矛盾を考慮に入れ、革命のために事態の進展をはかるには、多大な忍耐力を示さねばならなかった。顧問達は作戦指導に参加することによって、常に国民革命軍の素晴らしい成功にはかり知れない貢献をした。

首都はどこにあるべきか

革命軍は半年も経たないうちに、4つの極めて重要な省の支配権を握り、長江に進出することができた。予想されたように、革命地域の急速な拡大は統一国民革命戦線の内部に、激しい対立を引き起こした。一連の政治的、軍事的指導権をめぐる対立は革命中国の新しい首都の問題、つまり、広州政府をどこに置くべきかをめぐって展開した。

指導部を華中に移す必要があること、さもなければ、政府が革命の進展に重大な影響力を持たない、一省の広東機関に成る恐れがあることは誰にも解っていた。解放された武漢を新しいセンターにすることはあらゆる見地から自然であった。しかし、蒋介石は断固、これに反対した。

蒋介石は右派の指導者として、広く展開していた大衆運動から政府を隔離することに関心があつた。彼は国民党中央執行委員会が軍を南京及び上海へ強行前進させることを望んだ。武漢は蒋介石が支配権を持っていない軍隊によって占拠されていた。そして、武漢の軍事グループの中で唐生智が事実上、指導的役割を果していた。蒋介石は上海を占拠した後、共産党と大衆運動を弾圧するために、帝国主義列強と接触し、彼らの支持を得るつもりであった。

このことは後に実行された。蒋介石の緊急の課題は江西省の左派勢力を一掃し、また李済深の力を借りて広東の左派勢力をも一掃することであった。蒋介石は自分に敵対的なグループ間の対立に働きかけようとした。この際、江西省は一部の軍閥に対しては餌として役立つ可能性があつた。蒋介石は第一に、彼と敵対的な派閥《保定派》を分裂させること、また広西の將軍達の支持を得ることを望んだ。あらゆる観点から、蒋介石にとって南昌がより望ましい首都であった。

当時、ここは商人、手工業者、下級官僚のいる静かな町であった。それは20万足らずの人口を有し、厚い

中世の城壁に囲まれていた。工場制産業は小さな発電所を除いては存在していなかった。農民大会で、当時の南昌が《現在、過去、未来に渡って役人の町》と称せられたのは当を得ていた。江西で大衆運動が広がると、多くの地主達と金持ち連中が省の各地から南昌へ逃げて来た。

しかし、蒋介石が自分の要求の根拠を明らかにすることは容易ではなかった。すでに1926年10月、国民党中央執行委員会政治局会議で首都を武漢に移転する決議が採択されていた。蒋介石の唯一の論拠は、政府は軍事行動の時期には戦線により近くにしなければならない、ということであった。

その間、《武漢移転準備委員会》であるとみなされていた、政府メンバーの第一陣が広州から北方へ向かって出発した。その中には宋慶齡、陳友仁、徐謙、孫科が入っていた。彼らと共に顧問団長ボロジンもいた。1926年12月3日、彼らは南昌に到着した。3日後、山の保養地牯嶺で蒋介石との会議がもたれた。

検討されたのは政府の所在地の問題だけではなく、その時まで、広大な地域が戦い取られていた。そこで、文民政府を組織する問題を解決することが必要であった。《左派》はいくつかの場所に軍部の事実上の独裁に対抗するものを創ろうとした。彼らは孫文の三つの政治方針に従うことを求めた。実際には小作料を25%減額するという国民党中央執行委員会10月総会の決議を、原則として実行することだけが決定に到つた。

会議の後、委員会は直ちに漢口へ向け出発した。だが、蒋介石は政府メンバーの第二陣が到着するのを待つと称して、南昌に止まった。しかし、蒋介石の策略は全く見えすいていた。彼を南昌から引き出すには、極めて強力な圧力をかける必要があることは誰にも明白であった。

12月14日にはすでに第一グループは、政府全体が武漢に集結するまで、自らが国民政府委員会及び国民党中央執行委員会の合同委員会の資格で最高権力を有している、とためらうことなく宣言した。12月の終り、《武漢グループ》は秘密の決議を採択した：国民党中央執行委員及び委員候補全員は全体会議参加のために武漢に来ること。《左派》国民党员の目的は孫文の三つの政治指針を全国的に実行する問題を最終的に解決するために、全体会議で多数を占めることであった。

蒋介石に対抗するために、《左派》国民党员は汪精衛の中味のない革命の権威を利用しようとした。《左派》

の不幸は、国民革命思想の誠実な擁護者であり、経験に富み、且つ不屈の指導者が彼らにはいないことであった。だが、当時、多くの人々が汪精衛の巧みなデマを信じていた。また彼は中山艦事件まで政府が堅持していた政治路線に復帰するのではないかと大衆の間で考えられていた。1926年秋、汪精衛が政府首席の地位に就くよう要請する運動がすでに、広く展開されていた。

1927年1月初旬、第二の政府グループが南昌に到着した。蒋介石はこれを利用して、国民党中央執行委員会政治局を召集しようとした。その会議に出席したのは何香凝、林祖涵、鄧演達、譚延闓、張静江、朱培徳、陳公博、顧孟餘、財政部長の宋子文、中央執行委員会組織部長の陳果夫等であった。

蒋介石は政府の所在地の問題を決定する権限を、南昌では正式に持っていなかった。何故なら、例えば、その会議は関係者の意見を十分に代表していなかった——必要な定数を欠いていた。武漢側は蒋介石の考えについて、正式には前もって知らされていなかった。だが、蒋介石は抜け目のない政治家だったので、《左派》と考えられていた国民党員の一部の人々は彼のデマゴギーに騙された。ある程度、彼は自分の希望を実現した：臨時に政府を南昌に置くことが決定された。これに断固反対したのは鄧演達であった。宋子文も武漢に賛成して熱弁を振った。彼は多分、財政部の観点に立っていたのであろう。南昌へ移った場合、財政政策全体がうまく行かないであろう。そして、革命地域ではそれだけでなく、経済危機が増大するであろう、と彼は述べた。陳公博は威信という点から、また、南昌には国民革命軍が解放した各地域との確実な連絡手段が欠けているという点から、武漢に賛成した。

蒋介石はどのように自分の見解を押し通そうとしたか。彼は広州ですでに10月に採択された決議に、疑問を投げかける必要があった。蒋介石は、その決議が採択された時にはまだ、奉天派が北京に入っていないことを長々と述べた。今や、張作霖は自分が国家元首であるとすでに宣言し、国民革命軍と戦う準備をしていた。河南の状況は極めて危機的なものになっており、湖北の部隊はあてにならない。そこで武漢は深刻な脅威にさらされている。一方、浙江省では戦いがすでに始まっており、作戦指導は強化された南昌から行なう方がより望ましい、等々。要するに、美しい言辞で本当の意図を隠すことの上手な、抜け目ない、狡猾なデマゴグである、蒋介石の一面をまたもや見るこ

とができる。

張静江と顧孟餘は蒋介石を支持した。譚延闓は最初、広州でその問題は大局では決定されたが、状況が変化した場合それを見直すことができる、ともごもご言った。その後で、事態がはっきりするまで、南昌を臨時の首都にすることを支持した。中国共産党の最良の指導者の一人である林祖涵も、デマゴグ達に欺かれた。《恐らく、戦争の時にはそれはもっともであろう》と、彼は南昌案に関して述べた。朱培徳は、自分は論拠ある意見を持ち合わせていない、と外交辞令的に言明した。

ブリュヘルはその会議に出席していなかった。それにも拘らず、彼は議論の過程を熟知しており、その事について適時、ポロジンに知らせた。

会議の後、第二政府グループの一部は自発的に南昌にとどまったが、他の者は事実上、蒋介石と彼の派閥の名誉ある囚人となった。

中央執行委員会は形式上は、《首都》の問題のみを検討していたのであるが、その議論ははるかに深い意味を持っていた。これは大衆運動を発展させるための闘争であるか、あるいは、それを全面的に縮小し解消させるための闘争であった。後に、ポロジンは1924-1927年の中国革命の全過程を総括して、次のように述べた：《1月3日、南昌で決議（その精神は我々に反対している《中山艦事件》の実行者の行動と同じである）が採択されるまでは、我々は彼らに反対する行動を起こすつもりはなかったが、武漢に自分達の首都を創設する準備は充分に行なっていた》。ポロジンが《我々》と言っているのは、革命の誠実な支持者すべてを指していた。

1月6日、武漢の《左派》は南昌に電報を打った：《広州の政治局は中央執行委員会及び国民政府を、武漢に移すことを決定した。江西で行なわれた我々との会議の席上、その決定は確認された。我々の立場は強固なものとなり、大衆は我々を信じている。租界の接収（1927年1月初旬、武漢の大衆が帝国主義者の挑発に答えて、漢口の租界を占拠した——筆者）は国民政府が武漢に存在することを必要としている。指導者は運動が行なわれる際、大衆の先頭に立たねばならない。大きな軍事的変化が無い限り、決定を変更すべきではない。最終決定は中央執行委員会全体会議が下さなければならぬ。その時までは、先の決定が遵守されねばならない》。

政府を武漢に移転することを支持して広汎な大衆宣伝が行なわれ、多くの社会組織がこの問題に関して決

議を採択した。《左派》国民党員は当時まだ、蒋介石に批判の砲火を集中することが適切だとは考えていなかった。採択された書類の中では《封建的な黒い権力》について述べられたり、また蒋介石の親密な協力者、張静江が厳しく批判されていた。武漢移転の請願書は蒋介石自身あてに送られた。武漢—南昌論争の過程全体の中で、《左派》の持つ革命性の限界、彼らの首尾一貫性の無さ、大衆運動に対する明らかな敵意がますます明らかになった。

この点に関して譚延闓がコミニストである、第二軍政治部主任李富春に述べた見解はなかなか興味深い：《広東省の状況は厳しい。張静江は中国共産党に大いに不満を持っており、スキャンダルや混乱はすべてコミニスト達が引き起こしたものだと考えている。張静江とボロジンとの間には、ボロジンが中央執行委員会と政治局を統合させようとしたために争いが生じた。張静江と何人かの《左派》の人達は、労働者農民、学生運動が激化したのは中国共産党のせいであり、それ故、それらを弾圧しなければならないと考えている。私が思うに、張静江は蒋介石を説得して、挑発行為に出よう仕向けるであろう。争いを避けるために、この運動を弱めなければならない》。

しかし、首都移転が検討されている時期に、武漢の《左派》の人達は相変わらず、革命的言辞を唱え続けた：大衆運動の高まりによって彼らはそうせざるを得なかった。その上、蒋介石の立場はまだ強固ではなかった。かなり多くの軍事指導者達は総司令蒋介石が強大な力を持ちすぎること恐れ、武漢を首都にすることに賛成した。

1927年1月7日、もっぱら移転問題を取り扱う会議が武漢で持たれた。蒋介石に代表と電報を送り、即刻彼に武漢へ来るよう要求することが決定された。

一方、蒋介石は自分の立場の不安定さを感じて、ボロジンに問題解決のため南昌へ来てくれるよう電報を打った。だが、ブリュヘルは同じ頃ボロジンに、政府を漢口におくよう蒋介石に働きかけて欲しいと、数人の兵団の指揮官が自分の所へやって来ていると知らせた。ボロジンは、自ら出向くことは威信を傷つけると考え、租界の占拠の事がソ連からの電報でも触れられていることを口実に、拒否することに決めた。

蒋介石はやむを得ず、武漢へ赴かざるを得なかった。1927年1月12日、彼は《政府も総司令も武漢にいるべきだ》というスローガンを掲げる、革命的群衆を迎えられた。

あらゆる大きな社会組織や彼の歓迎パーティで、彼はそのようなスローガンを見たり聞いたりすることになった。パーティに招待された400人の客の中には、商業会議所代表や労働者がいた。蒋介石は政府をただちに移転することに同意せざるを得なかった。だが、自分のことには条件をつけた：《無論、私は移転する用意があるが、知っての通り、総司令は戦線の近くにいないなければならない。諸君が知っているように、現在、戦線は東方にあり、部隊は浙江、南京地区で戦っている》。

後でわかったことだが、蒋介石の同意は彼の他の無数の政治活動と同様に、全くの偽善であった。同時に、彼は武漢でも買弁の政治的、財政的支持を当てにすることができると感じた。彼の同郷人——漢口商人の寧波人会（寧波は浙江省の一都市で蒋介石の故郷の近くにある）が彼に百万ドルを贈った。そして、彼はそれを即刻南昌に持って行った。

ボロジンは当時、国民革命軍が直ちに上海へ進撃することは政治的に最も危険であると考えていた、と後に語った。もし、政府委員が南昌に留まっていたなら、そこで支配的な反動的雰囲気不安定で動揺しやすい《左派》に影響を与えたであろう。そして、武漢が革命の本拠となる時期は全く存在し得なかったであろう。だが、武漢の時期は、人民に対し非常に困難をもたらし、また悲劇的事件も生じたが、それにも拘らず、中国人民の広汎な層の革命的教育に大きな役割を果たした。

だが、武漢の《左派》も日一日、ますます信頼できなくなっていった。彼らは二つのグループに分化し始めた。一部の者は次のように考えた：《コミニスト達が我々を大衆の中に入れようとしないうちに、不平を言うべきではない。我々は自づから、大衆の中にあるコミニスト達の陣営から、彼らを追い出さねばならない》。この手の《左派》はますます中道派及び右派と親しくなっていった。

経済政策や社会立法の面で、《左派》は民族・革命戦線のために、鋭い意見の対立を和らげようとし、また彼らにとって状況から決定的な行動をとらざるを得ない時でさえ、それを避けようとした。1926年夏にはすでに、労働争議に関して強制的な政府の調停が導入され、そのために特別裁判所が設けられた。

1926年12月、軍閥達は勝手に地方の革命運動を弾圧し始めた。《左派》が優勢である武漢国民政府は、農民を迫害したことで部隊を叱責し、審査委員会を派遣した。その委員を節度を失った反動分子が簡単に殺害

したが、処罰を受けないままであった。《左派》を支持したのは警棒で武装したピケ隊員のみであった。ポロジンの評価によると、そもそも《左派》は《口先だけは勇ましいが、決定的な戦いの準備ができていなかった》。要するに、蒋介石派と《左派》の間には大きな差異があったけれども、革命軍と反革命軍との間の境界線は当地では、存在していなかった。

その間、南昌にいた中央執行委員会メンバーはひそかに、勝手に武漢に向かい始めた。2月2日、鄧演達が秘密裏に南昌から逃れ、顧孟餘がそれに続いた。顧問 Теруни はこの日ポロジンに、中央執行委員会メンバー全員の気分は移転に賛成であり、自分は彼らに一人ずつ出て行くよう勧めた、と報告した。《顧問達に対する態度は20日派（3月20日の中山艦事件を指す）的であった。譚延闓は兵団を浙江に派遣し、自分の副官に戦闘に加わらないよう秘密裏に指令を出した。譚自身はこっそり武漢に移ることに賛成していた。顧孟餘は南昌に到着すると、興味ある声明を発した（彼が当時、全く誠実に発言したと考えねばならない）：《私はもはやこれ以上蒋介石を信ずることができない。私が彼を信用する度に、彼は私を裏切った》》。

大衆運動の高揚は武漢側の国民党指導部の立場に影響を与えた。2月25日、中央執行委員25名の一部と、監察院の一部による会議が開かれた。その会議で採択されたのは、武漢移転に反対しないよう蒋介石にアピールすること、及び次の決議であった。財政の全面的集中化（総司令及び各軍閥のもとに資金が集中することに反対）、全外交政策を外務省に委ねる（蒋介石が帝国主義者と単独で交渉を持つことに反対）軍事評議会の復活、中国共産党との革命を目指す団結。さらに、両党の共同会議を召集することが予定された。《左派》国民党員の一部は相変わらず真に心から、革命的であった。彼らのムードは鄧演達に表われていた。1927年2月末から3月初め、彼は革命的国民党の綱領に関する論説を発表した：個人独裁に反対し、強固な革命政党、労働者及び農民運動を支持した。彼はとりわけ次のように書いている：《我が国は農民が大多数を占める国家である。何億もの抑圧された農民が極めて困難な闘いを行っており、かろうじて生きながらえている。そして、我々が彼らの解放を助けなければ、我々は革命的ではなく、また反革命の党であることになる》。

国民党《左派》の多くは、汪精衛が戻って来れば自分達の立場は著しく好転するだろう、という期待を相

変わらず抱いていた。2月末、汪精衛宛に一通の電報が送られた：《中山艦事件の結果は歴然である。軍閥達は党を破壊している。現在、我々には為すべがない。こちらへ来て、政府と党を指導して欲しい》。

武漢では国民党中央執行委員会総会の準備がなされていた。総会の少し前、譚延闓と最高執行機関のメンバー数人が漢口に到着した。左翼内部に、蒋介石の到着に関して二つのグループが生まれた：鄧演達と徐謙を指導者とする、より強硬なグループは蒋介石が党の規律に従うことを断固要求した。譚延闓を長とする《平和愛好》の、日和見のグループは繰り返し次のように述べている。武漢側はどうも不必要に蒋介石を攻撃し、彼が独裁を狙っていると非難している。結局、妥協が成立した：蒋介石に関する問題を提起せず総会を開くこと。

3月10日、中央執行委員会全体会議が開催された。全世界の抑圧された人民、中国の労働者及び農民に向けての宣言が採択された。労働者・農民及び各層の勤労者の利益に基づいて、孫文の三つの政治方針を実現することが決議された。全体会議は二つの省の創設を承諾した——労働省及び内務省。その大臣にはコミュニストが当てられた。見たところ、あらゆる状況から国民党《左派》が勝利を手中に取めているように見えた。ポロジンは《少なくとも言葉の上での勝利である》と慎重に述べた。

蒋介石仮面をとる

ポロジンのこの疑念には、残念ながら、重大な根拠があった。《左派》が絶えず動揺し、極端に革命的な決議をしたかと思うと、正当な理由も何の抵抗もなく譲歩した。一方、蒋介石は全権力を自己の手中に集中させ、左派勢力を弾圧するコースを断固として取り、色々カモフラージュはしたが、それをあくまでも首尾一貫して実行した。ポロジンは気象にたとえて次のように言った。南昌を占領するまでは、革命陣営の空は変わり易い曇りであったが、その後雨雲がすべてをおおった。

江西省の勝利以前、蒋介石は革命勢力に依存していたが、今や、彼は又もや中山艦事件の思想の積極的な普及者になり得た。蒋介石の立場は大衆の高揚におびえた、反動派全員の気分と意図を反映していた。

1926年11月には早くも、湖南省で数人の大隊長が農民組合を襲撃した。農民指導者達は山賊だと宣告さ

れ、滅多打ちにされた。大衆運動は多くの将校や將軍——以前の軍閥——を右に追いやった。それによって、特に蒋介石は広西閥や、反動派で親日派であり、唐生智の不倶戴天の敵、賀耀組を自分のグループに引き入れることができた。蒋介石の周りには、農地改革は自分の目的ではないと実感しつつあった軍人達が次第に集まって来た。

蒋介石は先ず第一に、江西と広東にできるだけしっかりした地盤を築こうとした。1926年12月初旬、蒋介石と李濟深は広東で革命運動を鎮圧する必要性について、何度も電報を交わした。

蒋介石は、大衆を弾圧するために先ず、彼らから指導権を奪わなければならないことを知っていた。彼はコミニストと左派が優勢を占めていた国民党委員会を解散することを狙った。蒋介石の意図は12月20日に行なわれた程潜との会議の際、明確に現われた。蒋介石は広東、湖南、湖北の国民党委員会の活動はひどく間違っている、と不平を述べた。《広東の委員会は新軍閥及び国民政府に反対するスローガンを掲げている、という情報を私は手に入れている。一体、この新軍閥とは誰のことか》——彼は激怒したように見せかけて尋ねた。全く、頭隠して尻隠さずだ！彼は続けた《湖南では、省委委員会の誤りの結果、農民組織の中に多くの盗賊が存在している（つまり、地主の土地を奪取することを支持する人——筆者）》。

蒋介石は程潜との二度目の会議の際、右派の人々は自分の憎しみを誰に向けるべきかを、誰にもわかるようにほめかけた：《国民党は取るに足らないものである。現在まで、国民党の活動は国民党員によってではなく、中国共産党員によって遂行されてきた。現在、農民運動は国民党の活動方針に合わない種々のスローガンの下に展開されている》。程潜は蒋介石に何をやろうとしているのか尋ねた。答えとして彼は偽善的な不平を耳にした：《貴殿は中国共産党員と共に活動することがいかに困難であるかを知らない、貴殿はまだ彼らと一緒に仕事をしたことがない、そこでそこにまつわるトラブルを全く知らない》。

程潜は憤慨した：《それこそ我々が指導者孫文の政策ではないか：一方で中国共産党とまた、他方でソ連との関係。貴殿は一体、何を言おうとしているのか》。

蒋介石とつき合いのあったかなり広汎な政治家達は、彼の真の意図に関して幻想を抱いてはいなかった。蒋介石が汪精衛の復帰に同意した時、皆には、これは全く表面的な同意にすぎないことだとわかっていた。

譚延闓は語った：《蒋介石は実際には、汪精衛に戻って来て欲しくなかった。私は張静江に宛てた蒋介石の電報を読んだ。その中で彼は、汪精衛が本当に戻りたがっているという情報が手元にあると書いている。蒋介石はこれを妨げる種々の手段を講ずることを提案している》。

すでに11月に、蒋介石は軍閥関係者の中に探り入れた。彼はその時奉天派と交渉を持った。その際、初めのうちのみ国民政府の名で、だが実際は自分の名で行った。1月初旬に開かれた中央執行委員会及び政府の会議で、蒋介石は実質的に《左派》をだますことができた。彼は二つの基本的な目標を立てた：江西省委員会改組の承認、及び一時的に南昌に政府を置く承認を得ること。二つの目標を蒋介石は達成した。彼はこのために一体、どんな譲歩をしなければならなかったか。

《左派》は汪精衛の復帰に最大の意義を認めていた。蒋介石はこの事に敵意を感じていたが、それにもかかわらず、汪精衛の復帰は彼にとって全く重大な脅威ではないと思っていた。汪精衛の復帰に同意する儀式が中国の封建的外交の《最高の伝統》の精神に基づいて、行なわれた。蒋介石は、国民党主席の職並びに、総書記のポストを廃止することを自分は提案している、と発表した。汪精衛を再び政府主席に任命しなければならない。蒋介石は即座に一石二鳥の行為を行なった：彼は見せかけの譲歩を行ない、現在、対立でずたずたに分裂している国民党指導部が今後、協調的になる（即ち、彼の真のライバルは存在しなくなる）という確信を得た。

《左派》（譚延闓等）は正式且つ合法的な地位に就いていた：主席の職は選挙で選ばれた。それ故、中央執行委員会総会までこの問題を決定することは不可能であった。汪精衛について言えば、彼は政府主席のポストを解任されているのではなく、《我々は単に彼の代理をつとめていたのである》（譚延闓の言葉によれば）。総書記の代りに、3人から成る書記局が作られた（顧孟餘等）。《居場所も不明な》汪精衛に招聘を伝えるために、顧孟餘を含む3人の使節団も選ばれた。その他の問題はすべて、1927年3月1日の中央執行委員会総会に提案することが決定された。かくて、蒋介石は外見上重大に見える譲歩を行ない、江西省における大衆運動の息の根を止めるチャンスを得た。

会議で、この問題について雄弁をふるったのは蒋介石の代弁者である、陳果夫で、彼は後に蒋介石の反革

命的国民党のリーダーとなる一人であった。正に彼は、《省委員会に発生している異常事態》を考へて、委員会の状況に関する問題を検討するよう提案した。江西省委員会は広東省の例にならって改組されなければならなかった。この事は会議の後、ただちに実行された。

選挙は蒋介石の配下の人々を江西省に入れ込むことを完全に保証するシステムによって行なわれた。国民党中央執行委員会と旧省委員会は各々24人ずつ候補者を出し、江西省代表者大会でその中から27人を選出し、その後、中央執行委員会がこの27人の中から、自己の判断で9人を選んだ。このような《民主的》制度の結果、委員会のメンバーは、7人の熱心な右派、1人の《半左派》、そして唯一人のコミュニストとなった。それはあたかも、市場支配人が権力的な笑いを浮かべながら、商人達を割り当てるようなものであった。結局、江西省では1927年1月からすでに、反動派の支配の時期が始まった。

会議の後の宴会で、蒋介石は熱烈な演説を行なった。《軍と大衆の間に断絶がある——彼は言明した——この断絶は拡大しつつある、そして、それは〈我らが党のメンバー以外の人達〉が労働組織を指導しているせいである。彼らは大衆を指導して間違った道を進ませている。この結果、国民党と大衆との間に不一致が生ずる可能性がある》。

1927年1月4日、ブリュヘルはボロジンに電報を打った：《労働者・農民運動関係の最近の情報は、特に広東省のそれは多くの人々を混乱させている。中国共産党がその張本人だとみなされている。この事を理由の一つにして、共産党を国民党から追放するための秘密の会談が行なわれている。あなたが来なければならぬ事態になっている。さもなければ、蒋介石はすべての人を自分の思いのままにするであろう。左派であつても無節操な連中はそうになってしまう》。

軍事面で、彼は東方へ、即ち《帝国主義者達の腕の中》へ突入するという自己の計画を、精力的に進め始めた。彼はブリュヘルに知らせることなく作戦上の決定を行ない始めた。

1月8日、北京のソ連大使館から T. Лонгва が次のように知らせて来た：《蒋介石は全般的な計画を無視して、浙江省に対する攻撃を強行している……蒋介石は沿岸地域を占拠したがっている。だが、作戦計画を持っていない。師団の移動に関する命令を彼がブリュヘルに知らせなかったのは、彼特有の行為であった》。蒋介石は総司令としての権限を利用して、勝手に軍長を任

命し始めた。

東方へ進出しようとする蒋介石の意図は、自分のまわりに反動派を結束させることに必ずしも役立たなかった、と言わざるを得ない。例えば、湖北東部へ自軍が移されていた広西將軍の李宗仁は、自分には必要のない、浙江省を獲得する戦いに本格的に巻き込まれるのではないかと恐れていた。蒋介石は新たな熱情をもって、策略にとりかかった。1月18日、彼は牯嶺に出向き、そこで程潜を説得しようとしたがむだだった。彼はボロジンをののしり、辞職するか自殺すると言って威し、また譚延闓を武漢へ向かわせないように、あらゆる巧みな策略を講じた。

同時に、蒋介石は唐生智に必死に取り入って、彼を左翼勢力から引き離そうとした。蒋介石は彼に3個軍を指揮下に置くことを許し、金銭的な支援を約束し、中央執行委員会政治局の仕事に参加させ、次の国民党大会で中央執行委員会のメンバーにすることを約束した。唐生智の語ったところによれば、蒋介石は彼に圧力を加えるために広西軍閥を利用した：《私が南昌へ到着した後、自崇禧、李宗仁、胡宗鐸が私のところへやって来て次のように述べた：我々は、あなたが困難な状況にあること、コミュニスト達が指導している大衆運動のせいで、あなたが税金を集められないことを知っている。彼らは国民党を壊滅しようと思っている。我々は中国共産党を抑圧し、労働者及び農民運動を規制し、制圧し、必要な時には、首謀者を銃殺し、コミュニスト達を国民党から追放しなければならない。我々の具体策を中央執行委員会に提案する権利が我々にはある。我々はこれを実行するために皆で漢口へ行こう》。

だが、蒋介石は当時ボロジンから離れるために、最大の努力をはらった。蒋介石は、革命勢力を抑圧する闘いにおいてボロジンが大きな障害であると考えた。1927年1月20日、彼はもっともらしく、中国の状況を正確に伝えるためにボロジンをモスクワへ派遣するという考えを持ち出した。《このためにはボロジンこそ適役である》と、蒋介石は欺瞞的に強調した。

早くも1927年2月初旬、蒋介石は自分が武漢へ移るための前提条件として、ボロジンの引退を要求している。1927年2月2日、顧問 Теруни はボロジンに報告した：《蒋介石の現在の主要な課題はあなたから自由になることである。あなたこそ、彼が独裁者になるのを妨げている人物である。彼は、あなたの代りに Радек が或いはカラハンを派遣するよう、ソ連に要請すること

を程潜と譚延闓に提案した。要するに、貴方以外なら誰でもよい。蔣介石はあなたに南昌へ来るよう電報を打った（貴方がそれを受け取ったかどうかは、私は知らない）。彼は貴方を、南昌から広東を通してソ連へ送り返すことを狙っている。程潜、譚延闓、鄧演達が警告の電報を送ってきた》。

蔣介石はあらゆる外交的戦略を弄したが、すぐには自分の思い通りにならなかった。他のいくつかの理由に加えて、軍閥間の激しい対立もまたこの妨げとなった。蔣介石及び彼一派の成功のために、誰も自分自身の利益を放棄する気はなかった。ポロジンは語った：《蔣介石は軍事計画を自分の派閥の利益に従わせた。北方軍閥が馮玉祥の国民軍に攻撃を加えるために、河南省に軍隊を集結している時に、蔣介石は北伐の運命を決定する河南省に進撃する代りに、浙江省で軍事作戦を遂行している。彼は中央執行委員会及び軍団の司令官の大部分を敵にまわした》。

2月の終り、蔣介石は最も困難な状況に陥った：彼の参謀長であり、右腕である白崇禧が浙江で負傷し、第2、第6軍はまだ戦線に到着できなかった。蔣介石は、3月に行なわれた中央執行委員会総会の決議を実行することは自分にとって極めて不利だと考えた。彼は時を稼ごうとして、平和愛好家であるふりをした。2月の終り、彼は宣言を出し、その中で一連の誤りを犯したことを認め、《党の統一と国民革命の更なる成功のために》総会参加等に関する中央執行委員会の提案を受け入れている。しかし彼は、華東における軍事作戦の完遂まで総会の延期を願っている。

蔣介石は総会までに、自分の支配下にある地域の行政権を密かに手中に収めつつあった。彼は勝手に、南京—杭州鉄道の長官を任命したが、武漢の大臣がそれをすぐに更迭した。外国人との関係を調査するために外務省が派遣した官吏を、蔣介石は外事と財務に関する自分の人民委員にした。その事があって、中央執行委員会政治局は当人を国民党から除名した。等々があった。蔣介石が武漢へ行くことが沙汰止みになった事情は、私はすでに書いた。

蔣介石は事実上、武漢と関係を断ち、多大なエネルギーをもって革命勢力を撃破し始めた。彼はこのための時は熟したと考え、人民を弾圧することを1月にすでに提案していた張静江に反対することを取り止めた。3月14日、国民党江西省委員会はメンバーが革命的存在である南昌市委員会を解散した。翌日、南昌市委員会メンバーは緊急集会を召集した。そこで、中央執行

委員会の最近の決議を支持すること、あらゆる党の力を結集すること、国民党の権威を高めることが要求された。

江西省委員会に蔣介石は立ち合っている。彼は熱烈な演説をする：《このようなスローガンが我が黨員に混乱を持ち込むことを、私は許すことはできないし、また許すつもりはない。南昌委員会が実行すべきものと決めなければならない唯一のスローガンは、指導機関としての江西省委員会を無条件に支持し、従うというスローガンである。私は、江西省委員会の決議に反対するすべての人に対し、ためらうことなく、しかるべきあらゆる措置を講ずるであろう》。

党の規律に対する偽の賛美に満ちた蔣介石の長口舌を聞いて、江西省委員会が中央執行委員会に承認されていないと、皆には解った。

蔣介石は自分の脅しを実行に移した。3月15日、彼は九江に向かった。3月16日、当地で、暴徒の大群がナイフと棒で武装して市委員会、労働組合評議会、第6軍政治部を襲った。市委員会の3人のメンバー及び労働組合の役員1人が殺された。ピケ隊員が暴徒を包囲した時、軍が介入し、彼らを逃した。蔣介石は自分のもとへ苦情を言いやって来た代表团に向かつて言った：《私はそれに関して何もすることができない。それは人民の意志である》。市委員会は中央執行委員会に代表团を送った。

同じ日に、南昌市委員会のメンバー全員が逮捕され、さらにその財務担当者、南昌の学生運動の指導者及び左派国民党の新聞《広西報》の編集スタッフが逮捕された。江西省委員会は漢口から送られてきている新聞《民友日報》及び《楚広報》の全ての号を押収する命令を出した。

九江と南昌の事件は、蔣介石が後に上海でより大規模に上演した反革命の出し物のリハーサルであった。

蔣介石は武漢を離れた後、主導権を握った。この事は所謂《孫文の月曜日》に行なわれる彼の演説の調子に反映されていた。彼は、自分の敵が当今、党内に存在しており、それ故、彼らには自分を権力の篡奪者であると非難する権利がない、また彼らが自分を破滅させるのを許さない、等々のことを大声で言いたてた。彼の演説は次第にますます明白に《ポロジンの陰謀》に向けられた。

蔣介石は重要な書類を入手し、自分の陰謀と悪事の跡を隠そうとして、武漢へ送り出されようとしていた文書を没収した。書類のある、九江に停泊中の汽船に

蒋介石の司令部付の兵士達が文書を保管していた役人達を打ちのめし、その船を没収した。

江西省で反革命的行為を始めてから、蒋介石はそれにのめり込んだ。血の跡が九江から上海まで、彼の後に続いた。蒋介石は安慶、蕪湖、南京、その他の都市の国民党委員会に打撃を与えた。

要約すると、一方の武漢における国民党《左派》及び革命運動の中心と、他方の蒋介石及び南昌派との間の激化しつつある矛盾の過程はこのようなものであった。《左派》は勿論、先ず第一に、いくつかの省に波及していた革命の高揚に支えられていた。しかし、彼らはまた軍閥間の矛盾を利用しようとした。孫文が広東省で第一段階として、革命のために、色々な省からやって来た將軍達のいがみ合いを利用しようとしたのと同様に、武漢派はある程度、蒋介石と唐生智との間にある相互の嫌悪感をあてにしようとした。

蒋介石に対抗する左翼風なライバル

北伐の進展にともなって、軍は広大な地域に広がり、政治的にも分散化した。この事は特に、《中山艦事件グループ》の影響力が低下したことに見られた。これを最初に利用したのは唐生智であった。1926年7月すでに、彼は26個連隊の軍隊を持つことを自分の課題とした。しかし、12月までにはもうこれをはるかに越え、46個連隊を自分の指揮下に集めた。

巨大な軍隊は湖南から政府が手に入れた収入を食いつぶしていた。そして、これが武漢派の財政状態の悪さの最も主要な原因であった。その上、湖南省は、1万人の勢力で省の西部を支配していた Yan Jiu Min が1927年1月末に死亡するとすぐ、全省が唐生智の支配下に入った。第9軍の軍長が逮捕され、賀龍が独立師団の師団長に任命された。

唐生智は自分の部隊を拡充するに際し、その出所については大して気に留めなかった。プリュヘルによれば、唐生智はどんなくずでも、また昨日まで呉佩孚の配下にあった者でもかき集めた（後者には漢水に駐屯していた第9師団や夏斗寅の部隊がいた）。

彼の軍が膨張したこと、また武漢解放に彼の軍が重要な役割を果たしたことによって、唐生智は高慢になった。彼は配下の将校達に語った：《我々がすべての事を行った、他の連中は何もやっていない》。唐生智は湖北省政府（政治委員会）に自分の陣営の人々を入れよ

うとした。それにも拘らず、軍閥は第7広西軍の一將軍、胡宗鐸に任された。委員会のメンバーに夏斗寅も加えられた。

唐生智は自分の威信を高めるために、1926年9月、ナンフウで自分の一軍団を三軍団に分けようとした。蒋介石はその際、悪意ある皮肉をこめて答えた：《恐らく、我々は軍長のために国立の休息の家を建てねばならなくなるだろう。とても多くの軍長がたまるだろう》。蒋介石は唐生智に対する資金の増大や、湖北省で唐がお手盛りでつくった政治委員会の承認、等々をなしですませるよう努めた。だが、それにもかかわらず結局、三軍団にする権利を認めざるを得なかった。

唐生智は蒋介石と同様に、大衆の革命組織の支持を得るために極めて《左派的》演説をした。蒋介石の反革命的行為が活発化するにつれて、唐の言辞はますます革命的になって行った。唐生智は個人的利害から一時的に、武漢の指導者達と同調した。

1926年10月10日、唐生智は湖南省の住民達への呼びかけの中で、産業の発展、帝国主義者の追放、及び《国内市場の発展を妨げている抑圧から農民を解放する》ことを訴えた。

彼の言葉によると、解放された国家の政治構造は農村から全国規模にいたる議会制度を持つ、共和国でなければならない。唐生智は宣言した：《農民、労働者、学生、商人、僧侶達よ、団結せよ。人は他人のために自分の生命を犠牲にすることを仏教は教えている。私は革命を遂行するために自己を放棄することができる》。

だが、この事は、唐生智が1926年11月孫伝芳と単独で交渉することの妨げにはならなかった。孫伝芳と蔣伯林は、唐生智が湖北省で自分の活動が制限されていることに不満を抱いているのを知って、彼を自分達の連合に引き入れようとした。唐生智は武漢を基本的には支配していたので、孫伝芳との戦いには関心がなかった。湖北省の西部及び河南省で国民革命軍の敵が活発化したことによって、なおさらそうであった。

農民運動に反対していた広西軍閥達は唐生智を自分達の味方に引き込もうと努めた。1926年12月19-20日の南昌における軍事会議で、胡宗鐸は長々と次のように話した。人民は軍から遊離している。そして、これは人民の無知と中国共産党の奸計のせいである。この唯一の解決法は人民を虐殺することである。

しかしながら、唐生智はただちに反動陣営側に移ることが得策だとは考えなかった。彼は胡宗鐸におよそ

次のように答えた：《貴方は一体、何を提案しているのか。私は貴方の勧めで国民政府側についた。それなのに、今や、私が反人民の立場にたつことを望んでいる。私は国民党员であるが、政治にあまり通じていない。そこで、私は中央執行委員会が希望したり決議したことを実行する》。彼はこのように抵抗したが、広西派第7軍の《保定派》（その中には李宗仁も含まれていた）は蒋介石側に付いた。

唐生智は革命の最終段階である武漢に於いて、極めて重要な役割を果たした。それ故、彼が1927年1月、軍団の政治部主任の一人に述べた見解はなかなか興味深い。勿論、これらの見解は全てデマの色彩が濃いものであるが、その若干の見解は常識から言って、否定できないものである：唐生智は次のように述べた。《今や、私は国民党の実態が何であるか解った。それは政党ではなく、蒋介石の独裁である。蒋介石が提案することに皆が同意する。そして、敢えて彼に反対する者は誰もいない。もし、左翼が存在するなら、彼らはこれらの問題について独自の見解を持っているであろう。今後、左翼グループは存在さえ不可能だろうと私は思う。……

彼らがここに止まる事を決定したのを私は知っている（右派国民党员は南昌に止まる決定をした）。その第

一理由は、私がより大きな力を持っているからである。第二は、私のいる湖北及び湖南には中国共産党の指導する、発展した社会運動があり、彼らはそれをも恐れている。彼らは国民政府を自分の財産と考えており、それを南昌に温存している。国民党员達は国民運動を支持すると言っているが、この運動が始まると、彼らはそれに反対し、それを積極的に弾圧することさえしている。

蒋介石は今や、岐路に立っている：彼の先兵である戴季陶と張静江はすでに右派に転じている。蒋介石もまた右派に転じ、反革命派になるだろうと私は思う。状況は悪いが、必ずしも絶望的ではない。もし我々が真の革命家であるなら、我々は敗北しないであろう。我々は人民と共に歩み、彼らを武装させ、教育しよう。そうすれば、6、7カ月後に我々は輝かしい結果を得るであろう》。

蒋介石は権力を求める闘いで、唐生智の強力な競争力を重要視せざるを得なかった。そこで、彼はあらゆる手段を尽して、ライバルの軍事的主導権を弱めようとした。蒋介石は中国東部を支配しようとする戦いを展開している時、唐生智に次のような命令を出した：防禦態勢をとって、河南省における敵の行動を監視すること。